

## 『国富論』における〈労働〉把握

——〈労働＝本源的購買貨幣〉説をめぐる——

長 島 伸 一

### はじめに

わが国におけるアダム・スミス研究は、戦前・戦中から綿々と積み重ねられて今日に至っている。スミス研究に関する内外の研究動向については、さまざまな角度から展望が与えられてきており、経済学史や社会思想史の分野でマルクスと並ぶ双壁を形づくっていることは周知の事実である。ところで、経済学説史の通史研究を〈世界の尾根〉の縦走になぞらえれば、スミス山脈の登頂ルートおよび下山ルートは、いくつかのコースが開拓されてきた。例えば、イギリス重商主義、近代自然法思想、初期労働価値論史、スコットランド歴史学派、フランス重農主義などの各研究ルートを通じてスミス山系に接近するというのが、多くの先人たちによって踏み慣された登攀コースだと言ってよいだろう。また、ポスト・スミスの下山ルートとしては、マルクス経済学の学史登山家にはリカードをめざすコースが、近代経済学の登山家にはマルサスをめざすコースが、好んで選ばれるのが現状である。こうして、スミス研究の裾野は、巨峰スミス山系の四周に数々のルートを用意して拡がっている。<sup>(1)</sup>

小論では、直接これらの研究ルートを歩くことはしないが、従来の成果を前提としたうえで、道徳哲学・法学・経済学からなるスミス連峰の最高峰『国富論』そのものの踏査に向かおうと思う。もちろん、全5篇からなるこの峰も、さまざまな難所をかかえている。本稿は、そのうちの第1篇第5章から第7章にかけて展開されている価値・価格論の検討のための予備調査を行うにすぎない。しかもこの箇所は、この峰の中心的位置を占めていることもあって、従来多くの精密な地図が書かれながら、現在でもなお書き込むべき標識が残されている。そこでここでは、従来書かれてき

たこの部分の地形図を紹介しながら、書き加えられるべきでありながら見落されてきた指標を提出することにしよう。

### I 「商業社会」の位置づけ

スミス価値論の検討にさいして、まず最初に明らかにしておかなければならない点は、第4章の最初のパラグラフで登場する「商業社会」(commercial society)をどのように把握し、それを『国富論』体系中に位置づけるか、ということである。第4章冒頭の文言、すなわち「いったん分業が徹底して確立されると、……かれ〔ひとりの人〕は、自分自身の労働の生産物の余剰部分のなかで、自分自身の消費をこえてあまりあるものを、他の人々の労働の生産物のなかで、自分が必要とするような部分と交換することによって、そのもろもろの欲望のはるか大部分を充足する」<sup>(2)</sup>という指摘は、すでに第1章の「統治がよくゆきとどいた社会では」<sup>(3)</sup>で始まるパラグラフや第2章の第3パラグラフなどでの発言を受けて書かれたものである。しかも、それが第5章冒頭のパラグラフにほとんどそのままの表現で受け継がれる、という関係にある。<sup>(4)</sup>したがって第5章は、分業の徹底・深化によって成立する「商業社会」を前提として価値論を展開するために設定された章とみなすことができる。

ところで、この「商業社会」では、「あらゆる人は、交換することによって生活し、つまりある程度商人になる」とされている。この「商人になる」という表現は、「自分自身の労働の生産物の余剰部分」の「交換」という指摘とともに、単純商品生産者のイメージと重ね合わせて読まれがちな表現である。そこで、従来「商業社会」は、独立生産者だけからなる社会と解されることが多かった。<sup>(5)</sup>たしかに、第2章第3パラグラフでは、「狩猟

民または牧羊民の種族」のなかで、いわゆる交換性向の帰結としてどのようにして職業が特化するかを例証する過程で、既に引用した第4章冒頭とはほとんど同じ文章が現われている。この点は、上の解釈に十分な根拠を与えているように見える。したがって、第5章の「商業社会」は、第6章に至ると、「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の社会状態」<sup>(6)</sup>と重ね合わされる、という解釈を生むことにもなる。<sup>(7)</sup>

しかしながら、分業——これは、工場内分業としての商品生産における労働の分割と同時に、社会的分業としての職業分化にともなう商品交換をも意味する——がくまなくゆきわたった末に成立する「商業社会」の構成メンバーは、独立生産者だけだと断定できるだろうか。分業論(第1~3章)の帰結として設定された「商業社会」は、三階級分化の資本主義社会とは異質の非階級社会として与えられているとしか解釈できないだろうか。

第1章でスミスが社会的分業の効果を例解するために採り上げたピン・マニュファクチュア内の10人の職人たちは、独立生産者でないことは言うまでもない。また、「自分自身の労働生産物の余剰部分」の「交換」という表現も、スミスのばあいには、賃労働者にはあてはまらない、ということにはならない。賃労働者の生産した労働生産物は、資財の所有者に帰すると考えているのではなく、労働者は「自分自身の労働の生産物」をかれらとともに「分け合う」と考えているからである。<sup>(8)</sup>さらに、第5章で「商品」や「貨幣」に対して「労働」を不変の価値尺度として選定するさい、スミスは資本-賃労働関係を前提として次のような発言をしている。「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値である。……／しかしながら、……かれを使用する人にとっては、あるときには比較的大きな、またあるときには比較的小きな価値であるように見える」。<sup>(9)</sup>このように、「商業社会」においても、「かれを使用する」資本家が登場していることは、否定しえない。もともとスミスの支配労働という概念じたいが、商品に含まれている労働(したがって労働生産物)に対する支配、つまり購買力という意味とともに、労働者の労働そのものに対する支配、つまり雇用力という意味とを含んでいる。<sup>(10)</sup>したがっ

て、分業論の展開の帰結として設定された「商業社会」の中に、ある時は独立生産者を指し、またある時には賃労働者を意味する「労働者」と並んで、使用者(雇主)がその構成メンバーとして含まれているのはむしろ当然のことと言えるのである。

それでは、独立生産者だけでなく賃労働者も「交換することによって生活し、つまりある程度(in some measure)商人になる」と見なされたのはどのようにしてであろうか。スミスは第10章第2節で、労働者を「自分の労働以外に生活手段をまったくもたない者」<sup>(11)</sup>と規定し、「あらゆる人が自分自身の労働という形で所有している財産こそ、他のいっさいの財産の本源的な基礎なのであるから、それはもっとも神聖で不可侵なものである」<sup>(12)</sup>と指摘している。この点からすれば、「労働」という「財産」ないし「生活手段」を商品化して、<sup>(13)</sup>雇主にそれを売る賃金労働者も、スミスにとっては、「ある程度商人になる」と判断されたのではないか。スミスの眼前にみていた社会は、労働者・資本家・地主という「あらゆる文明社会の三つの大きな、基本的な構成要素をなす階級」<sup>(14)</sup>からなる三階級分化の社会であった。しかし階級社会においても、その流通面で展開されている事態は、自由と平等を前提とする交換としてしか現われなから、階級関係も、労働と資財と土地のそれぞれの所有者間の商品交換関係と見なされることとなったのである。社会的分業と工場内分業とを理論的に区別するのを感じなかったスミスにとって、分業は商品生産を意味すると同時に商品交換をも意味していた。分業の発展だけから階級社会が論理的に出てくるとは考えられないにもかかわらず、スミスの設定した「商業社会」の構成メンバーが独立生産者だけに限定されなかった理由は、「労働」を唯一の「財産」として所有する賃労働者をも、商品交換の当事者としての「商人」——「ある程度」という限定詞つきの比喩的な商人——と見なしたからであると考えられる。

したがって、「商業社会」は、単純商品生産者だけからなる非現実的で抽象的な社会とみなすことはできない。三階級分化社会の「基本的な構成要素」としては独立生産者が含まれないにもかかわらず、「商業社会」でその存在が否定されるどころ

か、あたかも全面をおおうかのような印象を読者に与えることになっている理由は、「商業社会」がスミスの時代のヨーロッパの現実だけでなく、そこに至る歴史過程をも反映したものとして設定されているからである。スミス自身の語るところによれば、当時の「ヨーロッパのあらゆる地方では、独立の職人1人に対して、親方に奉仕する職人は20人」という比率になっており、例えば、独立生産者が必要以上の資材を獲得した場合に数人の「渡り職人」を雇用することも可能であり、したがって景気変動の推移によっては、「使用人や渡り職人に対する独立の職人の割合」が変動しう有这样的状況にあった。<sup>(15)</sup>独立生産者を「基本的な構成要素」から排除した三階級分化社会に対して、「商業社会」は、分業の拡大・深化の過程を反映するものとして、つまりスミスの時代のヨーロッパの現実に至る歴史的基礎過程をも包摂しう有这样的ものとして、設定されている。それは、第6章で始めて明示的に言及される二つの社会像——「初期未開の社会状態」と「資財の蓄積と土地の占有」以後の三階級分化社会という一応の歴史的区分をもつ二つの社会像——を分業の発展を通して媒介し、橋渡しするために設定された二重の社会像として与えられているのである。<sup>(16)</sup>それゆえ、「商業社会」を「初期未開の社会」にだけダブらせて理解することも、それを三階級分化の社会としてのみ理解することも、<sup>(17)</sup>正しい解釈とはいえない。

そうであるとすれば、第5章と第6章との関係は、従来のように、前者は投下労働量と支配労働量とが一致した単純商品生産社会＝「商業社会」＝「初期未開の社会」、後者はそれらが不一致の三階級分化社会＝「資財の蓄積と土地の占有」以降の社会、とみなし両章が歴史的前後関係にあるというように解釈するわけにはいかなくなる。<sup>(18)</sup>むしろ第5章は、三階級分化社会における価値論の前提として、いわば超歴史的な基本的規定を与えるために用意された章であり、両社会に通ずる一般的規定を説いている箇所と見なすべきである。このような判断は、それまでの諸章(第1～4章)が、商品交換が個々人のうちに内面化され超歴史的に説かれているという事実を想起すれば、それと対応した妥当な判断といえよう。それに対して第6章は、その冒頭でスミスなりに一応の歴史的区分

をもつ二つの社会状態を対比し、特に三階級分化の社会になると、「初期未開の社会状態」と比べて生産物の分配関係にどのような変化があらわれ、それにつれて投下労働量と支配労働量とのあいだにどのような変化があらわれるかを説くことによって、本来の課題である「諸商品の価格の構成部分」の検討に移っている章、とみなすことができる。したがって、第5章と第6章の関係は、連続的關係というよりもむしろ重層的關係にあるといえよう。そこで、誤解をおそれずあえて対比すれば、両章の關係は、ともに交換過程視されているという違いを除けば、『資本論』における「労働過程」論と「価値増殖過程」論との關係になぞらえることができるのであって、移行の問題——第1篇「商品と貨幣」第2篇「貨幣の資本への転化」から第3篇「絶対的剰余価値の生産」への移行の問題——になぞらえることはできない。生産力の増進という超歴史的な課題設定のもとで分業論から始まる『国富論』体系は、個々の労働過程の分業的連関を超歴史的に検討するというスミス独自の視角からその考察が始められている、とみなすべきである。<sup>(19)</sup>したがって、マルクスが第5章と第6章の關係を移行の問題として——つまり「諸商品に対象化された労働量」による交換の次元から「対象化された労働と生きている労働とのあいだの交換」の次元への移行の問題として——検討している点は、『国富論』体系の編別構成についての理解に問題を残す解釈といえる。<sup>(20)</sup>

## II 支配労働としての「労働」把握

スミスは第5章の課題を「交換価値の実質的尺度(real measure)とはどのようなものであるか、すなわちすべての商品の実質価格(real price)はどのようなものに存するか」の解明にあて、その表題を「諸商品の実質価格および名目価格について、すなわち、それらの労働価格(price in labour)および貨幣価格について」と記している。<sup>(21)</sup>これらの文言だけからでも、スミスにとって「交換価値の実質的尺度」、「商品の実質価格」および「労働価格」のあいだに厳密な区別はない、ということがわかる。<sup>(22)</sup>そして冒頭パラグラフで「ある商品の価値は、……その商品がその人に購買または

支配させうる労働の量に等しい」といい、第2パラグラフでは「あらゆる物の実質価格、つまりあらゆる物がそれを獲得しようと欲する人に現実についてやさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞 (toil and trouble) である」という。従来、前者は支配労働価値説、後者は投下労働価値説と呼ばれてきた。まず支配労働価値説(これは最近では価値規定ではなく価値尺度論だとも主張されているが<sup>(23)</sup>)から検討しよう。

第5章の第3パラグラフでスミスは次のようにいう。

「その〔財産の〕所有が、ただちに、しかも直接にかれにもたらす力は、購買力すなわちそのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物に対する一定の支配である。かれの財産の大小は、この力の大きさ、いかえればその財産がかれに購買または支配させるところの、他の人々の労働の量か、またはこれと同一のことであるが、他の人々の労働生産物の量か、のいずれかに正確に比例する。あらゆる物の交換価値は、それがその所有者にもたらすこの力の大きさにつねに正確に等しいにちがいないのである」。<sup>(24)</sup>

ここで「市場にあるいっさいの労働……に対する一定の支配」というのは、既に指摘しておいたように、労働そのもの(マルクスのいわゆる生きている労働)<sup>(25)</sup>に対する支配を指し、他方「労働生産物」には労働が対象化(体化)されているから、「労働生産物」に対する支配というのは、いわゆる対象化された労働<sup>(26)</sup>に対する支配を指すとひとまず考えておいてよいだろう。<sup>(27)</sup>スミス自身は、第7章で「市場にある諸商品または労働」を「市場にあるすでになされた作業(work done)またはこれからなされるべき作業(work to be done)」<sup>(28)</sup>と言い換えており、その限りで両者の区別を一応認めているとも考えられるが、ここでは支配労働としては両者は「同一」とであるとされている。したがって、マルクスの指摘するように「労働と労働生産物とを等置」<sup>(29)</sup>していると言ってよい。それゆえ、スミスの用いる「労働」という用語は、生きている労働と対象化された労働との双方を意味し、両者は「同一」のものと判断されている場合が多い。スミスの「労働」把握の特徴は、むしろ

この点を厳密に区別しないところにあるといえるが、かならずしも常に両者を等置しているわけではない。そこで、ここでは「労働」が生きている労働だけを指している場合を採りだしておこう。<sup>(30)</sup>

「労働は価値の唯一の普遍的な(universal)尺度であると同時に、唯一の正確な尺度であるということ、すなわち労働は、いつでもまたどこでも、われわれがそれによってさまざまな商品の価値を比較できる唯一の標準であるということは、明白であるように思われる」。<sup>(31)</sup>

これは、スミスが不変の(invariable)価値尺度を求めるにあたって、「商品」「貨幣」「労働」の三者を比較し、前二者は価値変動を避けられないことから、それを「労働」に求めた結論の文章である。「商品」や「貨幣」は労働生産物であり、それらには労働が含まれているが、例えば「金・銀で購買または支配しうる労働の量、つまりそれと交換される他の財貨の量」<sup>(32)</sup>は、不断の変動にさらされている。それに対して「労働」は、「いつでもまたどこでも」つまり時空を問わず超歴史的に価値変動しない「唯一の正確な尺度」である、とされている。とすれば、ここで不変の価値尺度として選定された「労働」は、生きている労働を指していることは明らかであろう。ここでの支配「労働」量は、労働生産物としての「商品」量や「貨幣」量(つまり対象化された労働量)ではなく、労働そのもの(生きている労働)を意味しているのである。

労働を生きている労働だけで考えているケースは、他の箇所からも引き出すことができる。例えば、第6章の第5パラグラフで、「自分の資財をあえて投じるこの事業の企業家」が「その完製品を貨幣・労働またはその他の財貨のいずれかと交換するばあい」<sup>(33)</sup>を想定しているケースは、その一例と考えられる。スミスにおける資本-賃労働関係は、一方での雇主による賃銀(=完製品)の前払いと資財の前貸し、他方での労働者による「労働」の提供という「交換」関係であるから、ここでの「労働」が「市場にあるいっさいの労働」ないし「これからなされるべき作業」としての生きている労働を指すことは明らかであろう。また、第5

章における「あらゆる商品は、労働と交換され、またそれによって比較されるよりも、いっそうしばしば他の諸商品と交換され、またそれらによって比較される」<sup>(34)</sup>という指摘も、上述の点を勘案すれば、一般には商品は「貨幣を媒介にして」相互に交換されるが、雇主がその完成品を「労働」そのものと交換するケースも考えられる、という表現とみなすことができる。このように、「労働」が対象化された労働とは区別された生きている労働としてのみ扱われている箇所は、「不変の価値尺度」論以外にも検出できる。しかしながら、上のように「労働」が生きている労働としてのみ考えられている場合にも、それと「貨幣」や「財貨」とを並べて「いずれかと交換するばあい」というように処理されている点は留意すべきであろう。ここでは、「労働」が、生きている労働だけに限定されながら、不変の価値尺度論における「労働」とは異なって、他の労働生産物との交換と「同一」のこととして処理されているからである。

また、第11章第1節冒頭のパラグラフには次のような指摘がある。

「食物は、つねに多量または少量の労働を購買または支配できるのであって、しかもこれを獲得するために、よろこんでなにごとかをしようといういく人かの人は、いつでも必ずいるものである。……食物は、ある部類の労働がふつうその近隣で維持されている程度に応じて維持しうだけの労働量をつねに購買できるのである」。<sup>(35)</sup>

食物の支配「労働」量というのは、この場合にも、労働主体（「よろこんでなにごとかをしようという」人）を想定していることから明らかなように、「これからなされるべき作業」としての生きている労働の「購買」ないし「支配」を指している。ほぼ同様の用例は、第2編第4章にも見られるのであって、「それら〔の財貨〕が支配しうる労働の量、つまりそれらが扶養したり（maintain）、使用したり（employ）しうる人々の数」<sup>(36)</sup>と言い換えられている点にも示されている。ここで「扶養」と「使用」のニュアンスの違いは、おそらく前者は不生産的労働者を、後者は生産的労働者を念頭に置いているからであろう。地主の「労働」に対する支配という場合には、不生産的労働者の「維持」

ないし「扶養」を考えているのであって、例えば、「地主の分けまえ〔地代〕の実質価値、つまり他の人々の労働に対するかれの実質的支配」<sup>(37)</sup>という表現がそうである。

しかし、これらの場合にも、かならずしも生きている労働の支配だけをスミスが考えていると判断することはできない。第5章の第3パラグラフでスミスは「労働と労働生産物とを等置」していたのだから、それは当然といえるが、以下に2・3の例を挙げてこの点を傍証しよう。

「〔優等地における〕地主の地代……は、つねに比較的多量の労働を維持（maintain）しうるであろうし、したがってまた、地主が比較的多量の労働を購買または支配できるようにするであろう。かれの地代の実質価値、すなわちかれの実力と権威、つまり他の人々の労働がかれに供給しうる生活必需品および便益品に対するかれの支配力は、必然にはるか大きなものになるであろう」。<sup>(38)</sup>

「地主の分けまえ〔地代〕がおよそどのようなものであろうとも、その分けまえは、つねにこれらの人民の労働と、この労働がかれに供給しうる諸商品とに対する支配権を地主にあたえるであろう」。<sup>(39)</sup>

地主の「支配力」ないし「支配権」は、ここでは「生活必需品および便益品」つまり「諸商品」に対する購買力とも解されているのであり、その限りでは、それらを「供給」するのに要した対象化された労働に対する支配をも意味している。既に述べたように、支配労働というのは、購買力と雇用力との両方を指して用いられているからであるが、同じ箇所からの次の引用文がその確たる証拠を示している。

「スペイン領西インド諸島が発見されるまで、ヨーロッパでのもっとも多産的な鉱山……の所有者の分けまえ〔地代〕は、かれがそれで等量の労働または商品のいずれか（either of labour or of commodities）を購買または支配しうるほどのものであったであろう」。

したがって、ここで改めて確認しておかなければならない点は、スミスの支配労働量は、一般には生きている労働に対する支配と対象化された労働

働に対する支配との双方が考えられているが、第5章で、労働の価値の不変性＝価値の普遍的な尺度としての労働を検出するさいには、そしてこの場合においてのみ、生きている労働だけが考えられている、ということである。不変の価値尺度論で、支配労働量を生きている労働だけに限定したスミスは、それをその後の展開において守りとおしたわけではない、<sup>(40)</sup>という点には充分注意を払っておきたい。したがって、支配労働を生きている労働に対する支配にだけ限定して『国富論』体系を整理する試みは、スミスの真意に即したものである、<sup>(41)</sup>ということとはできないのである。

### III 投下労働としての「労働」把握

つぎに、スミスの投下労働価値説について見よう。従来これに対する解釈としては、マルクス流の対象化された労働だけが考えられてきたと言ってよい。マルクスの「正しい価値規定」<sup>(42)</sup>という評価以来、スミスの投下労働に関する規定は、マルクスとの差異を検討するよりも、むしろ両者の同一性を前提としたうえでの議論が多かったように思われる。しかし、結論を先取りして言えば、スミスの場合には、投下労働は厳密に言えばマルクスの対象化された労働と同一視することはできないし、またそれだけに限定して把握されているとは言えない面を残している。支配労働を規定するさい、対象化された労働（労働生産物）に対する支配と生きている労働（労働そのもの）に対する支配とが区別されず、ほとんどの場合にそれらが等置されていたように、投下労働の場合にもそのような側面を抜き出すことができる。そこでまず、従来対象化された労働と解釈されてきた論点を再検討することから始めよう。

第5章でスミスは、16世紀の価格革命によって、「ヨーロッパの金・銀の価値は、それ以前の約3分の1に縮減した。それらの金属を鉱山から市場へもたらすのには比較的わずかの労働がつかされたから、それらの金属がそこへもってこられたときにもまた、比較的わずかの労働を購買または支配しうるにすぎない」<sup>(43)</sup>と指摘している。この文章には、次のような注目すべき論点が含まれている。第1に、「比較的わずかの労働がつかされ

た」ことを根拠にして、つまり投下労働を根拠にして、支配労働を説いている点に留意しておきたい。この点は、後に再び立ちかえることにするが、「労働こそは、最初の価格、つまりいっさいの物に支払われた本源的購買貨幣であった」<sup>(44)</sup>というスミスに独自の労働把握を前提とし根拠とする関係で可能となった指摘である。第2に、「それらの金属を鉱山から市場へもたらすのには」という表現は、『国富論』第1・2篇中にくり返しあらわれるものであるが、<sup>(45)</sup>それは、生産物の「購買は、かれ自身の労働の生産物が完成されるばかりか、売られてしまっただけで始めて可能となるのである」<sup>(46)</sup>という認識と照応する。そして、それがまた第2篇第5章で、資本をその用途の多様性にに応じて4つに分類し検討を加えていることとも対応するわけである。<sup>(47)</sup>しかし、第3に、ここで最も注目しておきたい点は、「労働がつかされた(cost)」という言いまわしのもつニュアンスである。あるいは、「1時間のつらい作業のほうが、2時間のやさしい仕事よりもいっそう多くの労働をふくんでいるかもしれない(there may be more labour)」<sup>(48)</sup>という場合のスミスの「労働」把握である。こういうスミスの表現から、投下「労働」は、マルクス自身によっても、またマルクスに拠るスミス研究者によっても、マルクス流の対象化された労働を指すとみなされてきた。果たしてそう言いきれ得るであろうか。

第6章における「職人たちが原料に付加する(add)価値」という表現や第8章における「労働がつかされる(is bestowed)ことによって原料に付加される価値」という表現にも、微妙な含意がある。<sup>(49)</sup>ところで、これらの規定は、第2篇第3章における生産的および不生産労働の規定と密接な関連をもつものであることは言うまでもない。<sup>(50)</sup>そこでは、生産的労働は「対象の価値を増加(add)させ」「価値を生産する(produce)」労働とされている。しかしまた、それは「ある特定の対象または売りさばきうる商品に〔労働〕それ自体を固定したり(fix)実現したり(realize)する」労働であり、「いわば、ある他のばあい必要に応じて使用されるために、貯蔵され(stock)貯えられる(store up)一定量の労働」であるともされている。それと対応して、不生産的「労働もその〔労働の〕価値をも

っている (labour...has its value)」が、「一般的にはそれがおこなわれるまさにその瞬間に〔価値が〕消滅してしまうのであって、あとになってからそれとひきかえに等量の労働を獲得しようところの、ある痕跡つまり価値をその背後にのこす (leave any trace or value behind them [services]) ということがめったにない」と規定されている。<sup>(51)</sup>

こうしたスミスの発言を総合してみると、不生産の労働者の労働にしても、労働-生産過程における労働者の労働にしても、はじめから「〔労働の〕価値をもっている」ものとして前提されていることがわかる。労働者の労働が、原料ないし対象の価値に「付加」し、価値を「生産」したり「増加」したりすると言わばあいにも、価値の移転と創造による労働の対象化というよりも、「価値をもっている」労働の持手交換（労働者から生産物への価値の持手変換）という性格が強い。「固定」とか「貯蔵」とか「価値をその背後にのこす」とかいう表現は、その現われといえるが、<sup>(52)</sup>いわゆる価値移転と価値形成（創造）との区別をなしえなかったスミスにとって、それはむしろ当然のことであった。しかも、スミスには、労働に対する独特な認識として、それを「本源的購買貨幣」とみなす理解があった。投下労働が、厳密には対象化された労働として把握されているとは判断できない根拠は、スミスのこの考えの中に示されているのである。

〈労働＝本源的購買貨幣〉説は、周知のごとく、超歴史的な人間と自然との社会的物質代謝の過程において、人間は「労働」を「貨幣」として自然に対して支払い、その代価として労働生産物を受け取るとみなす考えである。<sup>(53)</sup>この関係は、スミスによれば、「初期未開の社会」でも、三階級分化の社会でも見られる一般的関係と見なされる。既に述べたように、第5章は、「商業社会」を前提にして、こういう超歴史的な基礎的關係を解明するために設定された場であった。しかも、この説は、労働-生産過程という本来交換過程に解消できない社会的物質代謝過程を「労働」と「労働生産物」との交換過程とみなすことに特徴をもっている。ここから「労働と労働生産物との等置」も出てくることになるし、投下労働量と支配労働量とによる二面的価値規定がスミスなりに整合的に説かれ

た根拠も説明できる。<sup>(54)</sup>しかし、この説のもつ意味はそれにとどまらない。労働-生産過程を交換過程化するということは、超歴史的な物質代謝の過程を、特殊歴史的な商品経済的過程とみなすことになるが、それによって、三階級分化社会としての資本制社会では価値形成増殖過程として現われる事態をも、価値交換の過程とみなすことになる。労働と労働生産物との関係が、労働の対象化による労働生産物の生産を通ずる価値の生産過程とは意識されずに、労働という「痕跡」の「固定」化＝「労働の価値」（価値をもつ労働）の提供と、「労働の価値」を含む労働生産物の獲得という価値の交換過程とみなされることになるわけである。自然と人間との関係を上のように価値の持手交換と捉えれば、それと商品交換関係——「それら〔貨幣または財貨〕は、一定量の労働の価値を含んでおり (contain), それらを等量の〔労働の〕価値を含むと思われるものと交換するのである」<sup>(55)</sup>——とが次元の異なる関係であるという認識が希薄になり、対自然的関係と対社会的関係とが同質のものとみなされることになるのは、むしろ自然であろう。

こうして、生産物の生産過程を交換過程視したスミスには、価値の生産過程（価値形成増殖過程）を価値の交換過程とみなさざるをえない面が残されているのであって、スミスの投下労働価値説は、厳密に言えば対象化された労働による価値規定として把握されているとは言えない、ということになる。労働それ自体には価値はなく、資本の生産過程において労働力の使用価値としての労働を行なうということが、一方で原料や機械など労働手段に含まれている過去の対象化された労働を新生産物に移転させると同時に、他方で価値を新たに創造し対象化することだ、という考えは、この〈労働＝本源的購買貨幣〉説からは検出することができないからである。

ところで、このことは、支配労働における「労働と労働生産物との等置」を介して、投下労働を、スミス独自の対象化された労働という理解の他に、労働そのもの（本来は労働力の使用価値としてのそれ）とも捉える側面が残されているのではないかと、ということを予測せしめる。そこで改めて、労働は不変の価値尺度だというスミスの議論を検討しよう。スミスは、既に引用した結論の文章に

至る過程で次のように言っている。

「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値である、<sup>(56)</sup>」といってさしつかえなかろう。かれの健康・体力および精神が平常の状態で、またかれの熟練および技巧が通常のものであれば、かれは自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄し〔lay down〕しなければならないのである。かれが支払う価格は、それとひきかえにかれが受けとる財貨の量がおよそどのようなものであろうとも、つねに同一であるにちがいない。実際のところ、この価格が購買するこれらの財貨は、あるときは比較的多量であらうし、またあるときは比較的少量であらうが、変動するのはそれらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではない。……それゆえ、それ自体の価値がけっして変動しない（never varying in its own value）労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていっさいの商品の価値が評価され、また比較されるところの、窮極の、しかも実質的標準である。労働はいっさいの商品の実質価格であるが、貨幣はその名目価格であるにすぎない」。<sup>(57)</sup>

引用中最後の文章は、第5章の表題と照応するものであるが、ここでは「かれが支払う価格」（the price which he pays）という表現や「この価格が購買する（purchase）これらの財貨」という表現に、特に注目しておきたい。いうまでもなく、この表現は「労働こそは、最初の価格（first price）、つまりいっさいの物に支払われた（was paid）本源的購買貨幣であった」というスミスに独自の労働認識に固有の比喩的表現である。したがって、ここでの「労働」は、「労働者にとっては」という指摘をも考慮に入れれば、<sup>(58)</sup>支配労働ではなく投下労働を指していることは明らかであらう。しかも、それは、これまで検討してきたような意味での（つまり厳密に言えばマルクスのそれとは異なった、それゆえスミスに特有の）対象化された労働というよりも、むしろ労働そのものを指すということも明らかであらう。ここでスミスが述べていることは、例えば10時間の労働そのものは、「いつどのようなところでも」——つまり第6章で始めて議論の対象になる「初期未開の社会」でも「資財の蓄積と土地の占有」以後の社会でも、また後者の社会における例え

ばロンドンでもエディンバラでも——「労働者にとっては」——つまり小生産者にとっても賃労働者にとっても——10時間分の「安楽」「自由」「幸福」の「放棄」＝「犠牲」を意味するのだから、「等しい価値である」ということである。そして、第6章における議論を先取りして敷衍しておけば、労働者が自然に対して貨幣として「支払う価格」は、つまり「本源的購買貨幣」としての労働は、スミスの考えによれば、「初期未開の社会」において労働の全生産物を獲得しようが、三階級分化社会でそれを資財の所有者と「分け合う」ことによってその一部を獲得することになるが、また、後者の社会で「分け合う」比率がさまざまに変化しようが、「それとひきかえにかれが受けとる財貨の量がおよそどのようなものであろうとも、<sup>(59)</sup>つねに」10時間分の「労苦や煩勞」の支出（＝犠牲）という点では「同一」である。ここでスミスが考えているのは、交換過程化された労働-生産過程における労働そのものの提供（支払い）である、ということとは明らかであらう。

こうして、スミスの「労働」は、一方で支配労働における対象化された労働と生きている労働という二面が検出できたが、他方、投下労働も、スミスに独自な対象化された労働だけでなく、犠牲としての労働そのものの支出をも意味するばあいがあるわけである。この点を念頭に置いて、第5章の展開のスジ道を要約しておくことにしよう。

#### IV 「商業社会」における「労働」把握

第5章におけるスミスの価値論は、分業の拡大・深化を通じて第4章冒頭で設定された「商業社会」の再説とともに展開される。したがって、それは、歴史的区分を問わない超歴史的規定として与えられることになる。そしてまず、商品の価値は、その所有者にとっては、非使用価値であるから、それは支配労働量に等しいとする。この支配労働による商品価値の規定は、スミスによれば、「市場における」労働そのものの支配と考えても、労働生産物（したがって生産物に含まれている労働）に対する支配と考えても「同一のこと」である。スミスが「労働」に対する支配という場合には、マルクスのいわゆる生きている労働と対象化され



た労働との双方に対する支配が念頭に置かれているわけである。ところで、このように支配労働量によって価値を規定し (regulate) 評価する (estimate) ことができるのは、その商品に「労苦や煩勞」が費やされており、労働を「最初の価格」として支払ったからである。つまりスミスは、労働-生産過程における、労働による労働生産物の「獲得」を根拠にして、交換過程における他人の労働ないし労働生産物に対する支配を説いているのである。そして、このような対自然的関係における価値規定と社会的関係におけるそれとを媒介し、整合させることが可能であった究極の根拠こそ、労働過程を交換過程化して捉えた〈労働=本源的購買貨幣〉説であった。

つづいて、スミスは「交換価値の実質的尺度」つまり「商品の実質価格」ないし「実質価値」を労働に求めなければならない理由を改めて論議する。そして「諸商品の価値の正確な尺度」は、「それ自体の価値が間断なく変動する」商品や貨幣では不適当であるとする。要するに商品や貨幣に含まれている——といっても、労働過程を交換過程視するスミスは、価値の交換を通じて含まれていると見なしているのだが——労働(価値)量は不断の変動をまぬがれがたいから、「それ自体の価値がけっして変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていっさいの商品の価値が評価され、また比較されうるところの、窮極の、しかも実質的標準である」というわけである。こうして、商品や貨幣で「購買または支配しうる労働の量」というのは、「それと交換される他の財貨の量」つまり労働生産物の量ではないということになる。したがって、支配労働というものは、ここでは生きている労働そのもの、スミス自身の表現によれば「市場にあるいっさいの労働……に対する一定の支配」あるいは「これからなされるべき作業」に対する支配の意味に限定される。

その理由は、「等量の労働は、いつどのようなところでも、労働者にとっては等しい価値である」からである。労働者が労働-生産過程で自然に対して「支払う価格」は、その代価として受けとる労働生産物=賃銀(「自然的賃銀」あるいは資本主義的賃銀)がどのように変化しようとも、安楽・自由・幸福を放棄し、それらを犠牲にしなければならな

いという点では、「つねに同一である」からである。資本家的な観念つまり「通俗的な意味」(popularity)からすれば、労働生産物=賃銀の変動に目を奪われて、「労働の価値」ないし「労働の価格」は変動するよう見えるが、労働者にとっては、労働「それ自体の価値」は不変である。ここでスミスが念頭に置いている対自然的な労働は、商品に対象化されている「すでになされた作業」というよりはむしろ、「これからなされるべき作業」としての労働そのものである。

「自然的賃金」であれ、資本主義的賃銀であれ、労働者の受けとる賃銀を「労働の報酬」(recompence of labour)と捉えた根拠は、労働-生産過程を犠牲としての労働と賃銀との交換とみなし、賃銀を労働そのものの提供に対する代価と見たからである。それがまた、第6章以降で、価格の構成部分としての賃銀と労働とを同義の表現とする場合が生ずる想源をもなしているわけである。<sup>(60)</sup>また、労働-生産過程を通じて生み出される商品に価値が付与されるのは、「これからなされるべき」労働「それ自体」に「価値」があると見たからである。「労働の価値」が、交換過程視された労働-生産過程で付与されることによって、商品は価値をもつとみなされたからである。

ところで従来のスミス価値論の評価は、「商業社会」においては「正しい価値規定」として維持されていた投下労働価値説が、第6章の三階級分化社会では「放棄」されることになるという点に焦点をあわせたものが多かった。こうした通説的理解を批判する論者の場合にも、投下労働価値説は、マルクスのいわゆる「正しい価値規定」として、この点については疑問の余地はないものとされた。商品の価値の実体は、商品に対象化された労働量によって規定される、という見解がスミスの場合にもマルクスと等しくあてはまるという解釈は、ほとんど疑われることはなかった。しかし、スミスの投下労働価値説じたいは、すでにくり返えし述べてきたように、対象化された労働にしばった「正しい価値規定」とは言えないものを含んでいた。労働過程を交換過程化するスミスにとっては、その視角は価値規定にまで影響を及ぼすものであったからである。

こうした点からすれば、スミス価値論の検討の

焦点の一つが、投下労働価値説は「放棄」されたか否か、をめぐって行なわれてきた点に反省を促すことになる。「放棄」されたと主張するにしろ、されないかと判断するにしろ、前提としての投下労働価値説じたいの検討は、度外視されることが多かったからである。しかし、スミス価値論をめぐる所説の詳細な検討は稿を改めて論ずることにして、ここでは分業の拡大・深化にもとづいて設定された「商業社会」におけるスミスの労働価値説が、既にくり返えし指摘したように、労働・生産過程を踏まえて展開されている点を特に強調しておきたい。スミス以前の初期労働価値論が、例えばベティにおけるように、公収入に関する議論の「余論」や「副次的な問題」<sup>(61)</sup>としてしか現われてこないのも、つまり、経済学の基礎理論としての「原理」体系の中に位置づけられていないのも、それが社会的物質代謝過程を踏まえた価値論にはなっていなかったからである。また、スミスの同時代人の一人J. スチュアートの主著『経済学原理』の第1篇は、彼自身指摘しているように、「人類の増殖と農業の進展」が「世界のあらゆる時代において全体の基礎」<sup>(62)</sup>つまり超歴史的な物質代謝の基礎過程であるとの判断にもとづいて展開されている。そして、その限りで経済学原理の体系化も可能になったといえる。しかし、その価格決定論(第2篇第4章)は、マルクスも言うように、<sup>(63)</sup>「実質価値」を労働時間と並んで賃銀と原料によって規定するものであり、結局は労働価値論とは言えないものになっている。

以上の点からもすでにスミス価値論の特質は充分明らかであろうが、これをマルクスの価値論と対比すれば、なお一層明確となろう。スミスの投下労働価値説は、厳密に言えばマルクスのそれと比べて明瞭さを欠く諸点があるとはいえ、マルクスがその価値論を「労働過程」論を踏まえた「価値増殖過程」論で展開する以前に、すでに冒頭商品論で与えている点に思いをめぐらす時、スミス価値論の意義はおのずから明らかであろうと思われる。

- (1) 学史・思想史に関する主題および人物研究文献(文献目録、学界動向、導入史研究など)については、拙稿「経済学史・社会思想史研究文献解説

——T. モアから J. S. ミルまで——」(『長野大学紀要』5-1, 1983年8月)を参照。とりわけスミスについては、123, 129~30ページを見よ。

- (2) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by Edwin Cannan, 6th ed., 2 vols., London 1950. vol. 1, p. 24. (以下 *Wealth of Nations*, p. 24 と略記)。邦訳には、岩波文庫、中公文庫版などにも原本ページが記されているので、翻訳ページの付記は省略する。引用中の〔 〕は筆者のもの。以下同様。
- (3) 同様の表現として以下のようなものがある。  
「文明で盛大な諸国民」(*Wealth of Nations*, p. 2. cf. p. 13)「最高度の産業と文明を享受している国」(p. 7)「文明社会」(p. 7. cf. p. 56)「進歩した社会状態」(p. 49. cf. p. 53, 102)「改良された状態」(p. 162)「生命財産がかなりの程度に保証されているすべての国」(p. 267)。
- (4) 第2篇の序論にも、ほぼ同様の記述がある(p. 258)。
- (5) この解釈は、言うまでもなくマルクスによって与えられ多くの論者に受け継がれた。『剰余価値学説史』(*Theorien über den Mehrwert*, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 26, Erster Teil, Berlin 1965)における次の「仮定」は、マルクス自身にはスミスに即した「仮定」であると考えられている。「仮りに、すべての労働者が商品生産者であり、単に自分たちの商品を生産するだけでなく、それを売りますと仮定しよう」(S. 42. 以下 *Mehrwert*, *MEW*, Bd. 26-1, S. 42 と略記)。
- (6) *Wealth of Nations*, p. 49. ほぼ同じ内容を意味する指摘として以下のものがある。「狩猟民や漁労民という野蛮民族のあいだでは」(p. 2. cf. p. 17)「未開状態の社会」(p. 7, 102, 258. cf. p. 25, 162)「土地が共有であった時代」(p. 51)「事物の本来の状態」(p. 66, 67)「農業が粗放におこなわれていた初期の時代」(p. 166)。
- (7) 例えば、時永淑『経済学史』[改訂増補版]法政大学出版局、1971年、226~7ページ。小林昇『国富論体系の成立』未来社、1973年、96ページ、174~5ページ。
- (8) 「まずしい独立の職人は、出来高払いで働いて

いる渡り職人よりも一般にいっそう勤勉である。前者は自分自身の勤勞の全生産物を享受するが、後者はそれを自分の親方とともに分けあうのである」(*Wealth of Nations*, p. 85)。

(9) *ibid.*, p. 35.

(10) ただしスミスは雇用力という用語は使用していない。いずれの場合にも、購買力 (the power of purchasing, p. 33) ないし支配力 (the command, p. 40. cf. p. 160) という用語で括っている。スミスは両者を取りたてて区別する必要を感じなかったためであろう。しかし、後に見るように、スミスには両者を区別している箇所もある。なお、第4章では、「交換価値」を「ある特定の対象を所有することによってもたらされるところの、他の財貨に対する購買力」(p. 30) と規定している。

(11) *ibid.*, p. 139.

(12) *ibid.*, p. 123.

(13) マルクスは、「労働」の商品化をスミスの生産的労働論の中の指摘(後述)から確認したあと、次のように批判している。「労働そのものは、その直接的定在すなわちその生きた存在においては、直接に商品としてとらえることはできない。〔直接に商品としてとらえうるのは〕労働能力だけであり、その一時的な発現が労働そのものなのである」(*Mehrwert, MEW*, Bd. 26-1, S. 141)。

(14) *Wealth of Nations*, p. 248. ここでの労働者は、スミス自身の言葉によると「賃銀で生活する人々」であり、独立生産者は含まれていない。別の箇所でスミスは、「賃銀によって生活する人々、つまり労働者・渡り職人・あらゆる種類の使用人」(p. 70) と言い換えている。そして「さまざまな種類の使用人・労働者および職人は、あらゆる大きな政治社会の大部分を組成している」(p. 80) とも言っている。三階級分化社会における独立生産者は、スミスによれば、賃銀だけによって生活しているのではなく、賃銀および利潤〔および地代〕によって生計をたてているのである (cf. p. 55)。

(15) cf., *ibid.*, p. 68, 71, 85. このような「流動的・過渡的」状況については、小林昇「イギリスにおける『市民社会』の理論」(『小林昇経済学史著作集』II, 38ページ) および『国富論体系の成立』156ページ, 175～76ページを見よ。稲村勲「アダ

ム・スミスの経済原理論と『商業社会』(1)」(『論集』[札幌商科大] 31, 1982年)では、これを「対流的展開関係」(68ページ)と把握している。なお、経済史の分野で大塚久雄氏はこれを「社会的対流現象」としているが、氏の所説については、拙稿「『資本論』と重商主義——大塚久雄, 宇野弘蔵両氏の所説をめぐる——」(『唯物史観』25, 1983年11月)を参照されたい。

(16) このような私見は、時永淑氏の次のような指摘から示唆を得た。「スミスが『国富論』第1編第5章で……「商業社会」を対象とし、次に、第6章以降で、三階級分化の社会を対象とし「初期末開の社会状態」との一応の歴史的区分を与えながら、やはりこの三階級分化の社会をも同じく「分業の徹底した」社会像のうちに、したがって「商業社会」像のうちに、包摂される関係において考察した展開方法……」(『古典派経済学と《資本論》』法政大学出版局, 1982年, 184ページ)。但し、時永氏には、「商業社会」じたいの二重性だけでなく、「第5章と第6章以降とに見いだされるスミスにおける二重の社会像」(203ページ)という把握が併存している。この見解は、第5章を「初期末開の社会」と重ね合わせて理解する立場に通ずるものであり、私見とは異なる。なお、時永氏の後者の見解は、前掲『経済学史』229ページにも見られる。

(17) 羽鳥卓也氏は、本稿IIで見るように、スミスの支配労働が生きている労働の支配を意味する点に注目して、第5章でスミスは、「労働力が商品化されている社会状態」つまり「資本制的雇用関係を念頭においている」と判断している(「スミスの価値論と『初期末開の状態』」『三田学会雑誌』67-10, 1974年10月。引用は35, 38ページ)。それに対して「初期末開の社会状態」は、「成熟した資本主義社会を念頭におきつつ、そこから資本・賃労働関係を捨象することによって〔つまり、純粹に論理的な抽象という操作によって〕構想・設定」された「単純商品生産社会」であると解釈している(47ページ。〔 〕内は43ページから補足)。しかし、本文で述べた理由から、第5章は「資本主義社会」と「単純商品生産社会」とを「念頭」において「構想」された二重の社会像として「設定」されていると判断すべきではないかと思う。

- (18) 〈歴史的前後関係〉説の批判として、渋谷正「A. スミスの資本主義社会像についての一考察」(『経済学』〔東北大〕41-3, 1979年12月)がある。氏は、「商業社会」を「商品生産の全面的な展開という、資本主義社会の基礎的な側面を示す概念」(68ページ)、「資本主義社会をも包括する概念」(70ページ)と規定している。また、島博保「スミス価値論の構造」(『経済学』41-4, 1980年2月)も、それを「二つの状態が想定され」ている「複合」的な概念と促えている。なお、利潤範疇の確定を基準にして、成立史的に検討した水田健「アダム・スミス商業社会論の成立」(『法政大学大学院紀要』10, 1983年3月)は、「『国富論』における商業社会が、独立した商品生産者による商品交換社会であることは否定し難い事実であろう」(35ページ)としながら、それが「資本制社会にも貫徹する基礎的社会像」(37ページ)でもあるという微妙な評価を与えている。
- (19) 社会的分業としての「社会全般の仕事におよぼす分業の効果」(*Wealth of Nations*, p. 5)を考察するにさいして、それを「特定の製造業」における工場内分業によって例解しようとするスミスの考察方法は、後にも検討するように、第5章で説かれる〈労働=本源の購買貨幣〉説——つまり超歴史的な労働-生産過程と交換過程という商品経済に特有な過程とを同一視する考え方——と対応関係にあるといえよう。
- (20) vgl., *Mehrwert*, MEW, Bd. 26-1, S. 43ff. マルクス自身の古典派を中心とする経済学批判の基本的観点は、「資本と労働とのあいだの交換」を「二つの過程」に分けて考察する点にあった。この考察方法の意義と限界については、時永淑『経済学史』398ページ以下および『古典派経済学と《資本論》』第3部を参照。また、その視角がスミス価値論批判との関係ではらむ問題点について検討したものに、平林千牧「『経済学批判体系』の一考察」(3)(4)『経済志林』〔法政大〕42-1, 43-4, 1974年1月・1975年12月がある。
- (21) *Wealth of Nations*, p. 30, 32.
- (22) スミスのばあい、価値と価格、交換価値と価値は、ほとんどのばあいに同義語として用いられている。そのため「実質価格」(*ibid.*, p. 30, 35)に対して「実質価値」(real value, p. 38, 40)という用語も使われている。
- (23) 羽鳥卓也前掲論文, 36ページ以下。三輪春樹「アダム・スミスの価値論について」(『経済学論究』〔筑波大・院〕2, 1982年12月)18ページ以下。後者は、「スミスは支配労働をもって価値を規定してはいない。……価値の実体と価値の尺度とを区別して論じて〔いる〕」(21ページ)と主張しているが、本文でもふれたように、「交換価値の実質的尺度」と「実質価格」=「労働価格」=「労苦と煩勞」とは区別されているとはいえない。第5章冒頭パラグラフの、「ある商品の価値は、……〔支配労働量〕に等しい。それゆえ、労働は、……交換価値の実質的尺度である」という指摘も、価値規定と価値尺度とを区別していないことの表われと見ることができる。
- (24) *Wealth of Nations*, p. 33. 傍点は引用者。以下同じ。
- (25) 『資本論』第1巻 (*Das Kapital*. Erster Band, in MEW, Bd. 23)の「労働過程」論や「価値増殖過程」論で説かれているように、生きている労働 (lebendige Arbeit) とは、労働力の使用価値としての労働そのものを指す。もちろん、注(13)でも述べたように、労働と労働力の区別をつけえなかったスミスには、それが「価値の源泉でありしかもそれ自身がもっているよりも大きな価値の源泉だという独自の使用価値」をもつ、という認識は存在しない (*ibid.*, S. 208)。
- (26) マルクスのタームでは、vergegenständlichte Arbeit のほかに、過去の労働 (vergangne Arbeit) や死んでいる労働 (tote Arbeit) が同じ意味で使われている。「資本家は……諸商品の死んでいる対象性に生きている労働力を合体することによって、価値を、すなわちすでに対象化されて死んでいる過去の労働を、資本に、すなわち自分自身を増殖する価値に転化させる」(*ibid.*, S. 209)。
- (27) ここで「ひとまず」というのは、後に述べるように、マルクスの〈対象化された労働〉概念に相当するスミスの観念は、マルクスのそれとは異なるものであり、両者の規定の違いを明確にすることが本稿の目的の一つでもある、という含みをここでも残しておきたいからである。以下の本文中で〈対象化された労働〉という用語をスミスに対

して用いる場合にも、このことが考慮されている。

(28) *Wealth of Nations*, p. 61.

(29) *Mehrwert, MEW*, Bd. 26-1, S. 47. また、「他人の労働とこの労働の生産物とを混同している」(*ibid.*, S. 46) という指摘もある。

(30) これは、スミスの議論を観察者としてのわれわれが整理するばあい、どうしても必要な手続きである。というのは、価値と価格、価値規定と価値尺度などの区別にしても、スミス自身が厳密にかつ意識的に説いているのではないのと同様に、生きている労働と対象化された労働との区別も、スミス自身は、多くの場合に両者を等置し混同し同一視しながら、観察者の立場から見ると、部分的には両者を区別することができるし、また区別しなければならない箇所があるという性格のものだからである。

(31) *Wealth of Nations*, p. 38.

(32) *ibid.*, p. 34.

(33) *ibid.*, p. 50.

(34) *ibid.*, pp. 33-34.

(35) *ibid.*, p. 147.

(36) *ibid.*, p. 336.

(37) *ibid.*, p. 247.

(38) *ibid.*, p. 160.

(39) *ibid.*, p. 174.

(40) その理由については、*ibid.*, p. 40 を見よ。

(41) 三輪前掲論文、25～26ページ。第5章の第4パラグラフ以降は、支配労働（これは氏にあっては価値尺度に限定されている。注(23)参照）が生きている労働だけを指すと主張されているが、マルクスが『剰余価値学説史』で2度にわたって引用しているスミスの指摘——「完成品を貨幣・労働またはその他の財貨のいずれかと交換するばあい」——は、再び「労働と労働生産物との等置」に陥っていると判断せざるをえないものではないだろうか（vgl., *Mehrwert, MEW*, Bd. 26-1, S. 50, 51）。

(42) *Mehrwert, MEW*, Bd. 26-1, S. 45. 「彼〔スミス〕は事実上、意識していなかったにしても、彼が議論を展開している箇所ではどこでも、商品の交換価値の正しい規定——すなわち、商品に費やされた労働量または労働時間によるその規定

——を固持している」(*ibid.*, S. 42)。

(43) *Wealth of Nations*, p. 34.

(44) *ibid.*, p. 32.

(45) 例えば、*ibid.*, p. 38, 56, 60 などを見よ。「土地の地代と、それを産出し、製造し、またそれを市場へもたらすのに費やされた全労働の価格とを支払ってなおそのあとにどのような部分が残ろうとも、それは、必然にだれかの利潤にならなければならない」(*ibid.*, p. 54)。

(46) *ibid.*, p. 258.

(47) cf., *ibid.*, pp. 340 ff.. 4つの用途というのは、(1) 粗生産物の調達（農・鉱・漁業資本）、(2) その製造および調整（製造業資本）、(3) 粗生産物または製造品の運送（卸売商業資本）、(4) 小売のための分割（小売商業資本）を指す。

(48) *ibid.*, p. 33.

(49) *ibid.*, p. 50, 67.

(50) スミスの生産的労働論（これは『国富論』第4編第9章でも再説されている。特に、*Wealth of Nations*, vol. 2, pp. 172-76 を見よ）に対するマルクスの批評については、*Mehrwert, MEW*, Bd. 26-1, S. 122-44 を見よ。すでに見たように、マルクスはスミスの価値論に二面性を見だし、投下労働による価値規定を「正しい価値規定」と評価していたが、生産的労働論に対する評価の仕方、それと対応しているように思われる。しかし、他方で、生産的労働が商品に実現される労働であるという第2の規定は、「第1の規定〔資本と交換される労働であるという規定〕に事実上含まれている規定」(*ibid.*, S. 134) であり「もう一つの見解と交錯している」(S. 141) 規定であるとも述べている。本稿では、「正しい」視角と「誤まった」視角の併存という二分法による評価を避け、「正しい」とされている評価そのものを再検討するという立場に立って以下の考察を行う。

(51) *Wealth of Nations*, pp. 313-14.

(52) マルクスは、『経済学批判要綱』(*Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie (Rohe-ntwurf) 1857-1858*, Berlin 1974) の中で「A. スミスは労働の対象化を、有形的な対象のうちに固定化されている労働として、いくらか大まかに把握したことでしくじったにすぎない。しかしこれは彼にあっては些事であり、表現のまずさであ

- る」(*Grundrisse*, S. 729) といっている。だが果たして「表現」の問題に解消できるであろうか。
- (53) こうした解釈に対しては、揚武雄氏による批判がある(「アダム・スミスの価値尺度論についての一考察——労働＝「本源的購買貨幣」説の解釈にも関係して——」『経済学雑誌』〔大阪市立大〕71-5, 1974年11月)。その反批判として、時永淑『古典派経済学と《資本論》』172～73ページおよび小黒佐和子「アダム・スミスの価値尺度論について」(『経済研究』〔明治学院大〕53, 1979年)を見よ。
- (54) 時永淑『経済学史』230～37ページおよび嶋田力夫「アダム・スミス価値論の原理的性格について」(『本州大学〔現長野大学〕紀要』1, 1972年) 36ページ。
- (55) *Wealth of Nations*, p. 32. マルクスは、この引用文中で使われている「労働の価値」に対して、「価値という言葉は余計であり無意味である」と述べている(*Mehrwert*, *MEW*, Bd. 26-1, S. 47)。しかし、この言葉は、労働そのものが「価値をもつ」という独特な考えから出てきているのであり、スミス自身にとっては「余計」でも「無意味」でもない。そう考えられるのは、マルクスのスミス解釈が、投下労働をもっぱら対象化された労働としてのみ捉え、「労働の価値」による規定をそれとは無関係のものと捉えているからである。
- (56) マルクスは、『経済学批判要綱』や『経済学批判』(*Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, *MEW*, Bd. 13) や『資本論』でこの箇所を引用しているが、「等しい価値である」(be of equal value)を、多くの場合「等しい価値をもつ」(*denselben*〔*od. gleichen*〕*Wert haben*)と訳している。Vgl., *Grundrisse*, S. 504. *Kritik*, *MEW*, Bd. 13, S. 45. *Das Kapital*, *MEW*, Bd. 23, S. 61.
- (57) *Wealth of Nations*, p. 35.
- (58) 「労働者にとっては」という言葉の含意は、「かれを使用する人にとっては」ともかくとして、労働者こそが「労苦と煩勞」、「たえしのばれた辛苦、または働かされた創意」(*ibid.*, p. 33)の提供者である、という認識に基づくものであろう。また、労働そのものを「労苦と煩勞」(*toil and trouble*)や「辛苦」(*hardship*)とみなしたスミスの独自の視角と、「下級の職業においては、労働の楽しみのすべては労働の報酬(*recompence of labour*)にある」(*ibid.*, p. 124)という考えとは、対応関係にあると考えられる。
- (59) 「それとひきかえにかれがうけとる財貨」つまり「労働の報酬」という場合の「労働」は、対象化された労働ではなく労働そのものを指すことは言うまでもあるまい。
- (60) 例えば、「労働は、それ自体を労働〔＝賃銀〕に分解する価格部分の価値を測るばかりではなく、それ自体を地代に分解する価格部分の価値およびそれ自体を利潤に分解する価格部分の価値をも測る」(*ibid.*, p. 52)という指摘に典型的に現われている。このことと対応して、「地代・労働および利潤」と「地代・賃銀および利潤」という表現が並存することになっている(*ibid.*, p. 58. p. 52のキャナンの注13も見よ)。
- (61) W. Petty, *A Treatise of Taxes & Contributions*, London 1662, in *The Economic Writings of Sir William Petty*, 2 vols., Cambridge 1899. 邦訳『租税貢納論』(岩波文庫) 75, 77ページ。
- (62) J. Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, London 1767, in *The Works*, 6 vols., London 1805. 邦訳『経済学原理』(岩波文庫) (1)127, 283ページ。
- (63) *Kritik*, *MEW*, Bd. 13., S. 43.